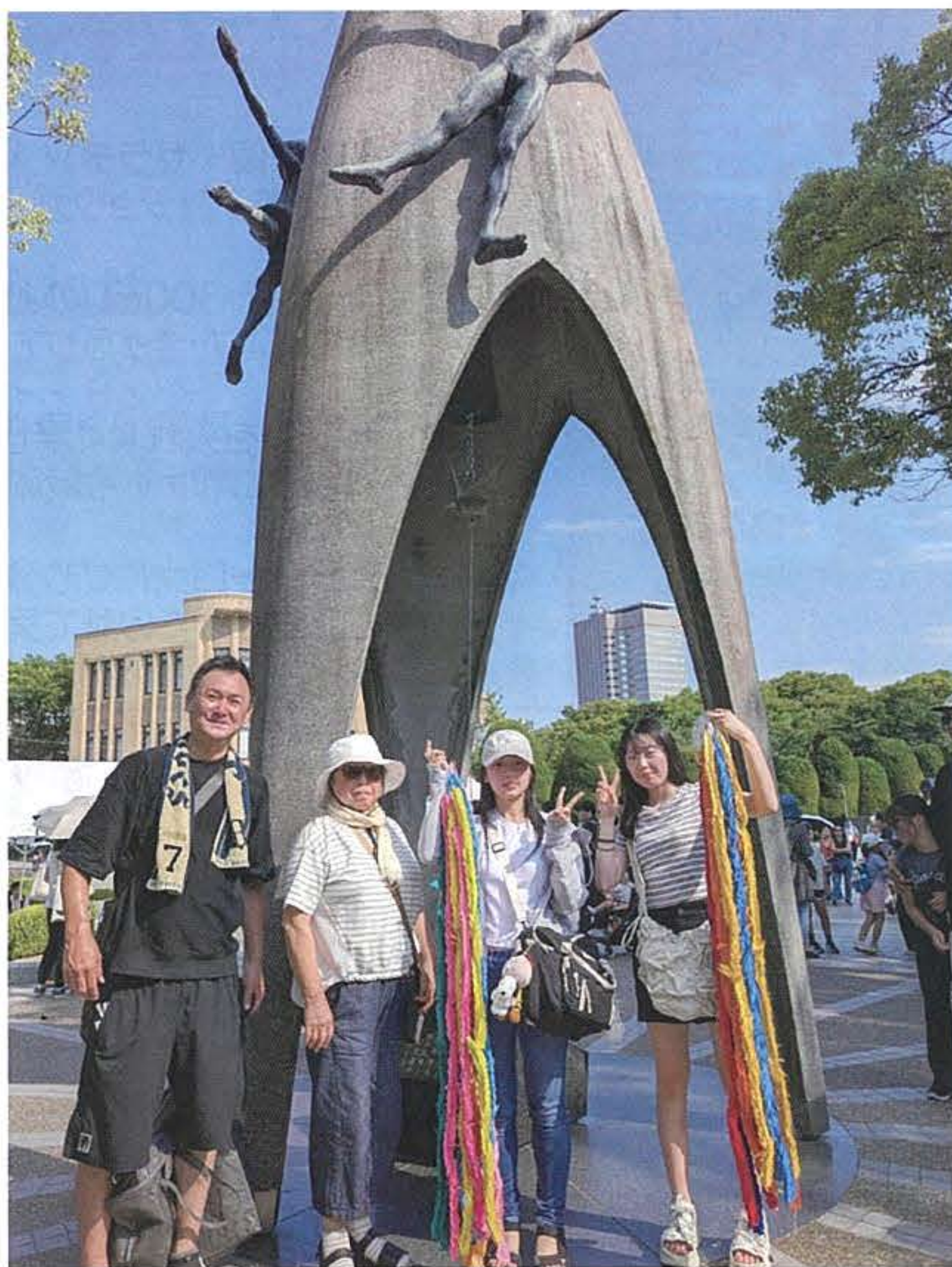


ピースアクションinヒロシマ 参加報告



▲「原爆の子」の像前で撮影。これからコープあおもりのみんなで折った千羽鶴を奉納しにいくところです。左から、西澤哲也さん（職員）、鶴田良子さん、鶴田瑞穂さん（中学3年生）、柄本百絵さん（高校3年生）。

きは、写真以上に恐ろしく、当時の惨状を生々しく現代に伝えていると感じました。また、折り鶴を奉納した際には、自分の平和への願いが他の人々の思いとつながっていくようで、不思議と温かい気持ちになりました。

今回の体験を通して、過去の悲しみを忘れず、平和の尊さを次の世代になくことの大切さを学びました。今後は、身近な人たちにこの体験を伝えることで、少しでも平和を広げる歩みになりたいです。

鶴田良子さんの感想

8月4日から6日までの3日間、ピースアクションinヒロシマに参加させていただきました。初日は元NHKアナウンサーの杉浦圭子さんによる「被爆者の証言」のお

8月4日から6日まで、広島市で開催された「ピースアクションinヒロシマ」に、組合員と青森県内の中学校、高校に通う学生、コープあおもり職員の4名を派遣しました。

今回、参加した3名から、感想を頂きましたのでご紹介いたします。

鶴田瑞穂さんの感想

私は今回、ピースアクションinヒロシマに参加し、映画「おかあさんの被爆ピアノ」を鑑賞したり、虹のひろばに参加したり、原爆ドームや平和記念資料館を訪れたりしました。

映画「おかあさんの被爆ピアノ」の鑑賞で初めて「被爆ピアノ」の存在を知りました。被爆ピアノは、広島や長崎で実際に被爆したピアノを、広島市の調律師である矢川光則さんらによって修復・再生されたものです。今でも矢川さんがトラックにピアノを積み、全国に運び、演奏会が開かれています。映画を観た感想としては、人だけでなく物までも被爆し、その記憶を語り継いでいることに驚きました。被爆ピアノの音色には、平和を願う多くの人々の思いが込められているように感じました。10月19日にはコープあおもりの



▲「虹のひろば」会場で使用された「被爆ピアノ」。「被爆ピアノ」は矢川工房所有の7台の他、全国に12台存在します。

主催で八戸市のポータルミュージアム「はうち」で『平和のつどい 被爆ピアノリレーコンサート』が開催され、青森でも被爆ピアノの平和を願う音色が響き渡ったそうです。

「虹のひろば」では、被爆者や語り部の方々の体験を直接聞き、戦争の悲惨さや平和を伝え続けることの大切さを強く学びました。特に、お母さんのお腹の中で被爆し、生まれてから障害を抱えることになった、日本被団協事務局長の濱住治郎さんの話は深く胸に残りました。戦争や原爆は、その場にいた人の命をうばうだけでなく、まだ生まれていない命や、その後の人生にまで深く影響を与えてしまうことを知り、胸が苦しくなりました。

原爆ドームを実際に目の前で見たと



▲「被爆 80 年の広島で考えるグローバルヒバクシャ」でのロールプレイングの様子。原子力施設を建てたい人、反対する住民に役割を分けて、それぞれの立場について考えました。

話しと、核政策を知りたい広島若者有権者の会「通称【カクワカ広島】」の「被爆80年の広島で考えるグローバルヒバクシャ」に参加しました。

2日目は映画「おかあさんの被爆ピアノ」の鑑賞と「虹のひろば」に参加しました。3日目は、平和記念式典を観覧しました。

そんな中で特に印象に残ったのは、平和記念式典での広島県知事の挨拶でした。

、法と外交を基軸とする国際秩序は様変わりし、剥き出しの暴力が支配する世界へと変わりつつあり、私達は今、この繁栄が如何に脆弱なものであるかを痛感しています。

（中略）核のない新たな安全保障のあり方を構築するために頭脳と資源を集めるべきことです。

（中略）苦痛の中で命を奪われた数多くの原爆犠牲者の無念を晴らすためにも、我々も決して諦めず、粘り強く、核兵器廃絶という光に向けて這い進み、人類の、地球の生と安全を勝ち取るうちはありませんか、

私はこの言葉を聞きたかったのだ。と思いました。

平和記念資料館には原爆投下後の無残な写真が無数に展示されていました。どれも痛々しくて見ることも苦しくなります。戦争を起こすということに怒りが湧いてきます。今年の平和記念式典には過去最多の120か国が参加し、ガザ地区で戦闘が続くイスラエルとパレスチナからも大使が参加しました。平和記念式典に参加したことで、世界の国々が地球を、生命を守るという決意を固めて欲しいと思いました。

柄本百絵さんの感想

戦後80年の節目の年、私は初めてヒロシマを訪れました。ピースアクションinヒロシマの企画で、被爆伝承者の方や胎内被爆者の方のお話を聞きまし。他にも虹のひろばや平和記念式典に参加しました。

まず、初めに驚いたのが、原爆ドームです。むき出しになった鉄骨や窓がない大きな建物で原爆の恐ろしさを目の当たりにしました。教科書で見るとは違い、あの日の惨状が目に浮かぶようでした。

今回の3日間の旅でも印象に残っている話が2つあります。

1つ目は、元NHKアナウンサーの杉浦圭子さんの「被爆者の証言」です。父の良治さんの被爆体験を事細かくお話しして頂きました。被爆直後の広島の様子、良治さんがどのようにして助かったのかなどです。お話の中で大人、子供、同じく1945年の親戚の子たちが被爆や被爆後の後遺障害で亡くなったお話もありました。自分の大切な家族や友人が苦しみ、死に倒れる姿を見ていた人はどれほど苦しかったことでしょうか。戦争だから人が死んでしまうのは仕方ないことだと思ってしまうのも悲しいことだと思えます。原爆を落としたのは戦争を終わらせるためだと



▲被爆には原子爆弾だけではなく、核実験や原子力事故、原料となる鉱石の採掘などがあり、海外にも被爆者が大勢いることを学びました。

言う人もいます。しかし、原爆を落とす以外にできることがあったのではなにか？と思いました。平和記念式典で広島市長がこう述べられていました。「自分よりも他者の立場を重視する考え方を優先することが大切であり、そのことで人類は多くの混乱や紛争を解決し、現在に至っているということです。」相手の話を聞き、相手を理解できなくてもまるごと寛容する。世の中全員が全員、戦争をしたくないと答えられる環境をつくるのが大切だと思えます。杉浦さんが「伝えたいこと」としておっしゃっていたのが、「みんな大切なひとり」命の重さに違いはないということ。みんながみんなを大切に思い、考え、行動することで戦争や原爆はなくなるのかもしれないと思いました。

2つ目は、グローバルヒバクシャについてです。ヒバクシャは世界中にいて、ウランの採掘、核実験、原子力発電の事故などで放射線被曝の被害を受けた方です。核兵器を作るために被爆するなんてどうしてそんな危険な兵器を作ろうと考えるのか理解できません。しかし作られてしまった以上、これ以上使われないようにしなければいけません。そのために私たちは平和について考え、学ばなければいけないと思います。被爆地に実際に訪れたことで戦争や原爆について学ばなければいけないことがまだまだあると思いました。知って終わりではなく家族や友達に伝えていくこと、残酷な現実から目を背けないことが大切だと思います。伝えようとしている人はたくさんいます。あとは私たちが聞き、伝えていくことが必要なのです。